

【『がん生殖』をご存じですか？】

時々新聞の記事で見かけますが、あまりなじみのない言葉かもしれません。「がん」という言葉には命を脅かす響きがあります。半世紀前、少女漫画の薄幸のヒロインは白血病で、それは不治の病でした。ですが近年、白血病を含む多くのがん治療は格段に進歩し、病気を克服するがんサバイバーもどんどん増えてきました。そのようながんサバイバーには小児や若者も多数含まれています。ただ、抗がん剤や放射線による治療は卵巣や精巣を障害する作用もあり、実は、子供を望む若きがんサバイバーの半数近くが不妊の問題を抱えているという報告もあります。がんの治療には、妊娠する力を残すこと（妊よう性温存）も重要な課題となってきたのです。

その解決策の一つとして、治療前に卵子や精子を凍結保存しておくというアイデアが誕生しました。体外受精の技術（生殖医療）を使ってがんサバイバーの不妊治療を手助けすること、それが『がん生殖』です。

【妊娠する力を残す、その具体策は？】

がん治療に入る前に元気な卵子、精子を凍結保存するにはどうしたらいいのでしょうか。

精子は、射精された精液が手に入れば、凍結保存することは比較的容易です。しかし射精ができない（精子を作っていない）男児の場合は、現在のところまだ実用的手段はないようです。

卵子は、体外受精の方法と同じように、排卵誘発剤（注射）を使用して卵子を多数育て、卵巣を穿刺して吸い出します。配偶者・パートナーがいる場合は受精卵にして、そうでない場合は未受精卵のまま凍結保存します。月経がまだない女児の場合は、片方の卵巣を摘出し（腹腔鏡手術が必要）うすくスライスして凍結保存します。

受精卵は体外受精と同じ方法なのでかなりの妊娠率を期待できますが、未受精の卵子を凍結保存した場合、1個の卵子が赤ちゃんとなる確率は良くて8%程度とも言われており、卵子の数が多いほど有利となります。また、卵巣自体の凍結保存の実施例はまだまだ少数です。圧倒的に女性の方が手間も時間もそして費用もかかります。

【連携ネットワーク、助成制度があります！】

もし「がん」と診断されたら、患者さんも主治医も一刻も早く治療に入りたいと思うでしょう。その時、『妊よう性温存』ということに思い至らなければ、準備もできずにがん治療に突入してしまいます。そんな、将来の妊娠のことまで考える余裕のない患者さん・主治医に対し、アドバイスができる専門スタッフ、がん治療施設と生殖医療施設を結ぶネットワークが各県に整ってきました。また、これらの医療は自費診療であり高額となるため、「がん患者妊よう性温存治療費助成事業」という助成金もできました。**がんサバイバーの人生を応援するための『がん生殖』**、まずはがん治療をする医師に、そして、もしかしたら患者やその関係者となるかもしれない皆さんにもぜひ広く知っていただき、必要な方がスムーズに活用できるようになればと願っています。